

三浦梅園の手紙（上）

麻田剛立宛

日本医史学雑誌三十一卷二号
昭和六十年一月三十日発行

昭和六十年一月十四日受付

酒井シヅ

一、手紙入手の経緯

三浦梅園の珍しい手紙があると、或る古書店から聞かされたのは、昭和五十九年二月であった。それが麻田剛立宛であると聞かされたとき、一瞬耳を疑うほど驚いた。これは何があっても小川鼎三先生に知らせねばと思い、古書店に他に売らないように念を押して、小川先生の許に走ったのである。

しかし、その途中、今この手紙のことを先生に知らせるべきか否か逡巡する気持もあった。すでに先生の病状は再び元気な姿で研究室に出ることは無理であることが誰の目にも明らかであった。その上安くない買物である。先生はこれを知れば必ず買おうといわれるに違いない。手紙の内容を自分で調べられないことに苛立ちを覚えさせては申し訳ないという気が働いたことも否めない。

だが、日頃の、特に先生の最も晩年に近い頃は三浦梅園と麻田剛立にのみ関心を寄せておられたことを知るだけに、この手紙を他人の手に渡すには忍びなかった。

先生に手紙の仔細を伝えると、予想通りに言下に「買うように」という返事である。先生はすでに一人で立って歩くことも、書物を手にとる力も失われていた。しかし、直感的にこの手紙の価値を見抜かれたに違いない。

筆者は直ちに古書店に連絡をして、入手を頼んだ。ところが、手紙がすでに別人の所有になってしまっていたのである。しかし、仲介に立ったその社員の尽力で、買い主から取り戻し、小川先生の手許にこの手紙が届いたのは二月の半ばを過ぎていた。

手紙を手に入れたとき、先生はそれが尋常でないことを速かに察知され、精査することを筆者に命じ、先生と筆者との連名で、月例会に報告することが決った。それが二人の連名の最後の仕事となったことはいうまでもない。

一、例会発表まで

例会での報告が決ったものの、先生の病状は最も近い例会で発表を行わねば、その内容を伝えることができないという状態にあった。それまでも大出血で、一時は予断を許さぬ状況に置かれたこともあった。

急遽、手紙の解説に手をつけたが、三浦梅園の手紙は難読な文字が多いので有名な手紙であると聞く、とても筆者の手におえるものでない。早速、東京大学の史料編纂所の梅沢ふみ子氏や愛知大学の田崎哲郎氏の力を借りて解説し、どうやらその内容を読み取り、それを先生の枕頭で読み聞かせたのは三月初旬であったと記憶する。

それから、手紙の内容の考証に入り、判明したことを先生に報告し、意見を聞く作業に入ったが、このことが予想以上に先生の心の張りになっていたようである。例会の日を文字通り指折り数えられた。例会は何時だと繰り返し尋ねられたのであった。また、周囲の人にも大事な発表なのだ、再三言い聞かされたという。

だが、先生は自分で調査し、考証されたら、もっといろいろな事実が判ったであろうにとどこかしく思われたに違いない。それまで筆者にとって三浦梅園も麻田剛立も小川先生の語られるのを聞くだけ、つまり、門前の小僧としての知識だけしかなかった。そのことや時間が限られていたこともあって通り一遍のことしかできなかった。

しかし、どうやら形を整えて、三月例会で発表した。その例会が終ったあと、先生の病状は急速に悪化し、その直後か

ら十分な会話を交すことがほとんどなくなってしまったのである。

三、手紙文

〔前欠〕事御座候 春時御持恙御発不被成夏をも御迎被成候哉承度奉存候 拙者も此八日御城下へ罷出候 御両家様御安健被成御座候 被動貴念間敷候 随て小子壯健罷在候 然は先達而は以御紹介中井先生遂文通忝奉存候 其後早速御両所様共に書状指上申度奉存候処 近親病人有之 終快復不仕 彼是奉失本意候御寛怒猶又中井君にも可然奉頼候 中井君より不存寄両品御嘉贈御厚志過分之至 何分御序宜敷御挨拶可被下候

一前度御尋申上候件々御取失被成候由 追而又々書付指上申候 定而御落手可被下候御中間之節乍御苦勞御答奉待候 一阿蘭陀真凶定而御うつし取被成候半何とそ以折一覽仕度奉存候

一中井氏初女孝状従姉子様相達落手以御深志彼者之孝終托不朽之事欣幸不過之候 乍不存御文章筆力驚人奉存候

一姉子様御物語にて承候へハ和吉心底ちと拙者書付上候とハ相違も御坐候趣にも相□申□候 是又和吉宅に帰り申候後 老婆やとひ初女と宅に置時分ハ他家ニ宿し合巻に至候事ミへ不申候 是等も早賤不学之人の自然と道ニかなひ候ハ捨かたき事には御坐有間敷や任御心安貴様迄得申上候

一夫ニ付拙者かねてかの安岐浄国寺往昔長昌寺と公訴候節遠嶋之時其弟子之僧以孝心師之僧得赦而帰候一件とくより吟味仕候得とも委細わかり不申候 是等ハ別而偉行誠に独行伝にも可出事ニ候 是等之事終に伝ふる人なくなり候半こと口おしき事ニ御座候 定て此あらましハ御存知被成候半御事と奉存候

一何やらん姉人様より御身之上少々御氣遣にも思召し候様に御物語とも承候品ハ存不奉候得とも折角御慎言為成候様奉

希候

一乍延引中井君へ書状又々指上候 御序御届被下候

一兼而も御尋申候へとも御答無御坐候 中井君、詩も御好被成候哉 強而御好不被成候哉 若御好被成候も折節御吟咏も御坐候は 御中間ニ御書付御見せ可被下候 且御門人様へ初相識謝意奉存候 左ニ申候段御序に御聞可被下候 一不之字天下通して漢吳をわかたず音フト読申候不二 不庭 不義など之類にて御坐候 ズト読候処之不之字之音 正音いつれに御座候や承度奉存候

一詩法去年少々考置申候 御存知之通此辺詩話むき□と無御坐候 三家詩話 東人詩話 詩杯 広記詩法入門 詩人玉屑 都其敬詩話 詩藪 卮言などの類にて御坐候 詩話類之揚詩法に益ある書御尋置可被下候 手まき物などハ求申様之事も可有御坐候

一拙者も当三月十五日従木下左衛門督様不存寄麻地酒壺鐫御恩賜難有奉存 任御心安御沙汰申上候

一西洋歴書御覽被成候哉 ちと御所益も御座候哉承度奉存候

一当地之風氣銀札すたり不申在中一向通用不仕 大小□今迄ハ近年見事ニ御坐候

一乍輕少扇子一柄書状呈申候 驗尅進上申仕候 御受納奉希候 恐惶謹言

四月十八日 三浦安貞

麻田剛立様

(以下三号)